

京鹿子



Copyright © 1999 by the author. All rights reserved.
www.ijournal.com

12月号

豊 田 都 峰

灌 響 集 その四十

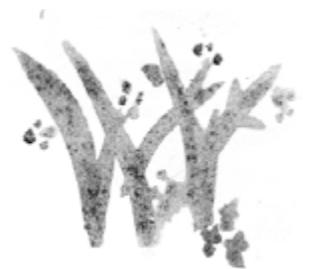
厄 日 の 雲 と も な ら ず 染 ま り 暮 る
水 澄 む や 野 末 を 伝 へ る 風 も き て
も く せ い の 回 覧 板 と な り に け り
あ か つ き の 献 灯 菽 の 白 さ も て
あ げ び ひ と つ ひ み つ の 基 地 の 旗 じ る し
あ げ び 熟 れ 夕 日 に ま む か ひ る る 記 憶



けいとうのひだに捕らはれたる夕日
色鳥の二羽ゐて木末の風さばき
色鳥は雑木林の配色屋
すすき原雲まよはせることなき日
日のすすき溜めても脇のあまさかな
穂芒やむしろ遠さに馴染みけり
探究はすすきの絮のひと綿毛
遠きもの失ひそめてすすき枯る

枯野きて

丸山佳子



落葉する音よりひくきふた三言
手鏡の顔消すおのが白き息
かき鍋の湯気の中より猫しかる
枯野きて切なきまでに愛さるゝ
短日の女の胸に針きらと

秀華採集

稲妻や光と闇の割符めく

高田好子

「割符」は木や紙など認印を押し二つに割ったもの。二つがきっちり合う所に意味がある。光と闇の鮮やかな合体を「稲妻」とした感覚がよい。

石庖丁よりの生活や水澄めり

荒尾茂子

雲を追ふ遊子となりて草の絮

北村梢

原始時代の「石庖丁」を持ち出し、そんな昔から続く人間の生活を「水澄めり」とまとめた点がよい。後句は、雲とともに旅するものとして「草の絮」を認識した点を評価する。



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

ひぐれいろ

街の灯のひぐれいろして冬きざす

ふりかへる家訓の重さ木守柿

禽の目の一点にあり木守柿

系露忌 二句

韋駄天の雲は嶺越ゆ冬隣

露草のつゆまるびあひははのこと



— 近 詠 —

島の盆

和田 照海

早星水を盗みしみづの音
船虫の錆びの兆して回天基地
地蔵みち厄日の潮の来て濡らす
家舟に産衣の乾く島の盆
名水を足して溺るる水中化

神麓集



思い出で 北村香朗
事多こと重おもき八月はつげつやつと過とぎ
シベリヤシベリヤ行いきまぬがれし幸さいさちとせむ
ノモーンノモーンハンを斜しやに抜ひけり松虫しょうちゅう草
ハロンハロンアルシヤンアルシヤン梓すずの露つゆ天風てんぷう呂
白樺びやくの林はやしを過とぎてふり向むかはず

夏なつばてのやうな電車でんしゃに乗り眠ねむる
目めの合あひし後のちも心こころに星ほし流ながる
僧そう去されば余あま白しろだらけの真ま夏なつ空そら
疲つかれたるいのちまだあり冷ひや奴やつ
ニユースニユースにはならぬ幸さいせ雪ゆきの下した

枯か 芒ぼう 藤岡紫水
いづこより来る風かぜの縞しま葛くわの花はな
霧きり深ふかし見みえては消きゆる漢かんの脊せき
七しち・八はち本ほんそれはそ・れなり枯か芒ぼう
澄あむ水みづに逃にげもかくれもせぬ一ひと樹じゆ
残のこり香かもしづかに閉しぢて秋扇あきあふ

秋あき 丹生をだまき
体てい調てうに一ひと喜よろこ一ひと憂うれ永ながき夏なつ
苦く瓜くわや昔むかし話わに自みづか慢まんもちらり
行い儀ぎよき盲もう導どう犬いぬ坐ます秋暑あきあつの電車でんしゃ
何なにくれと未な練れんあるらし穴あなまどひ
俳誌はいしより名なの消きえし友とも増ぞうえて秋あき

としのくれ 竹貫示虹
湯ゆをわかすだけの晝ひる餉くわうやとしのくれ
晩年ばんねんの日ひざし満みちたる冬木立ふゆきだち
年の瀬としのせの過とぎゆくものに刻ときと人ひと
加齡かろうとは足あし算さんならず木の葉は髪かみ
味噌汁みそじゆへ今日けふ満み足の刻ときみ葱ねぎ

金木犀 柴田朱美
金木犀きんぼし一部いちぶ始はじめ終はつを見てをりぬ
身みに叶かふ明あるさに居いり金木犀きんぼし
言こと葉はより重おもき無な言ことや金木犀きんぼし
金木犀きんぼしささくれだちてくる気配きはい
金木犀きんぼし寺てら領りやう俄がに艶えんめけり

神麓集



龍の口 丸井巴水
鶏頭の花に好かるる膝小僧
大花火長き余韻を顎で受け
火も水も吐かぬ龍口秋の古寺
尊きは涼しさ谷の磨崖佛
蛇の衣有刺鉄線なかば錆び

野分 塩貝朱千
稜線を離れて重き野分雲
こころの灯手囲ひにして夕野分
葡萄棚深きところに愛そだつ
月のかげら風に舞ひ散る黄コスモス
花蕎麦の野を浮き立たせ昏れふかむ





京鹿子集

豊田都峰選

稲妻や光と闇の割符めく

長岡京 高田 好子

法師蟬終着駅のまだ見えず

かやつり草が揺れてゐたずつと昔
秋隣やさしい人が住んでゐる

汽水湖の白きうねりや厄日明日

秋の海遠い日本へ思ひはせ

ロサンゼルス 丸田 信宏

燕去り山は背筋を伸ばしけり

異文化の話題は尽きぬ月光下

石包丁よりの生活や水澄めり

荒尾 荒尾 茂子

まだ慣れぬ右側通行秋高し

一茎の桔梗に句縁深まりぬ

損をする苦勞はあらじ夜業かな

仕舞湯の暗き灯一つ虫一つ

展望台トリプルブルーの夏の湖

オハイオ 水谷 直子

新盆会「飛燕」ニ乗リテ来ラレタシ

ミシガン湖白髪まひ上げ水遊び

雲を追ふ遊子となりて草の絮

福山 北村 梢

夏の湖波打ちぎはの丸き石

月の名は夜々にかはりて雁来紅

ミシガンを飾る朝焼けかもめ飛び

全快を祝ふ赤飯星月夜

アリソナ 伊吹 之博

記念日の花火脳裏に帰路急ぐ

そこはかとなく揺らしみる水中花
そよぐ木もそよがぬ樹にも蟬時雨
あめんぼう池の広さに凝つて(松島の一の坊の庭)

カフト虫子の関心事鋭き眼

伊藤 希眸

爽やかやアーチエリー選手の友傘寿

かなかなの鳴き継ぐ里に住み馴れし

札幌 野村 軻枝

足固めして登り行く露の原

子すいとの葉裏がくれに日暮来て
水輪つくる鯉に口あり秋近し

風吹けばハタリハタリと秋簾

直江 裕子

近道をしてきた証し藪虱

抱擁のポスター秋は腕のなか

夏草やとぎれたところ祖父の墓

酒田 藤波 松山

人生の先が見えない暑さかな

夜の桃ほのかな老いの匂ひする
切り爪の飛んだところに秋出水
蓑虫に夢さらはれし文学部

とめどなく寂しき朝や白木権

佐々木紗知

枝豆の茹で上る香や半ズボン

渋川 東 秋茄子

里帰り忘れし踊思ひ出す

諍ひの理由忘れし茸飯
爽やかや高き煙突よりジユゴン

夏バテに手料理嬉し里の味

高野 春子

日盛は外出控へオリンピック

哄笑のごとき風来て秋桜
鯛やまだ濡れてゐる渡し舟
福耳の幼子を抱く夕月夜

夏野菜豊作うれし道祖神

さいたま 神田 惣介

緑陰の老女活き活き長話

かくれんぼ芋虫むんと膨めり
秋冷の画仙紙にみる水のいろ

連添ひしペンで日記や終戦日

布川 孝子

余生とはかく在るものか蝸牛

ゼミ暑しあくび前線停滞す
クラクシヨン一つ残して帰省終ふ

原発は廃止あるのみ原爆忌

千葉 河内 桜人

八月の轍やへツセの忌

汗噴けり道路補修に遠廻り
朝起きの三文ほどの草を引き

蟬哭きて十八年戦争終る